

コーヒーを駆ける 第4回 「c. m. h の終わらない夢」

1977年の神戸・北野界隈は落ち着いた住宅街でした。古くから北野には、交易のために神戸に居住する外国の方が多く、住宅街の中には異人館が点在しています。その街の中にポツンポツンと高級ブティックや有名レストランがありました。日給がやっと3,000円の時代に1,500円のランチを出すレストランです。しかしそのブティックの従業員や地元の住人が日々頼るお店がない。山岸直幸氏は "金鉢の中で水を売ろう (高級店の多い街の中で市民目線の商いをしよう)" と考え、その年に竣工した北野アレー* (KITANO ALLEY 1977年) の地階に、カフェイストアール (Café HISTOIRE) を開店します。自らカウンターに立ち、ハンドドリップコーヒーでのスタートでした。



HISTOIRE.2002年撮影

たまたま友人の父が北野アレーのオーナーであり、管理人代わりに喫茶店を構えたのですが、翌年のNHK大河ドラマで風見鶏ブームが巻き起こります。その後にアンノン族が北野を目指すのですが、洋館と石畳の坂道がロマンチックなイメージを創り出し、北野は一気に神戸の顔となっていきました。

北野アレーは安藤忠雄氏の初期の設計で、個性的な建築でした。打ちっぱなしのコンクリートで複雑な空間を作り上げているのです。山岸氏は建築家と知恵比べするかのよう、使う立場で創意工夫を凝らします。ホールの中に太い円柱の柱があると、向き合うように大きなR壁を構え、袋小路のような三角形に近いトイレのR壁を、明るくモダンなタイル張りに改装しています。2000年の訪問時には、この太い円柱に元力士の旭道山のサインがありました。現役を突然引退して地元神戸から国会議員になり、挨拶に来店した時にお願いしたのです。イストアールとベーカリーの円柱に一本ずつですが、折角だから鉄砲をやって欲しかったと笑います。

(上・ベーカリーキッチン) (下・地階のトイレ)



いつしか時代がバブルに突入していくと北野は混乱します。北野のイメージと若い女性を中心とした観光客への期待から、東京資本のブランドショップやアパレル企業が次々と進出してきます。商業ビルの開発が進み、住人の落ち着いた暮らしが妨げられた時代でした。その時代もいつしか終わり、徐々に東京資本の撤退が話題になり始めた頃、山岸氏は行動します。1994年に北野坂のリンズギャラリー (RIN'S GALLERY 1981年竣工 安藤忠雄氏設計) の、向かって左に「MODE c.m.h」、右に「CAFÉ BISTRO c.m.h」を開店したのです。



RIN'S GALLERY 2000年撮影

このお店が、北野の住人に喜んでもらうことを願って形にした、「セ・エム・アッシュ (c. m. h) 」でした。

C・costume「衣」、M・manger「食」、H・habitant「住」とフランス語の頭文字を冠した、山岸氏のコンセプトショップが誕生したのです。

小さな芸術ホールを目指した セ・エム・アッシュ はメインダイニングにグランドピアノを据え、集まった店員は皆一芸の持ち主です。求人募集要項は、「ピアノを弾く人・歌える人・絵を描く人・パンの職人・ケーキの職人・料理人、またはそれらが好きな人」というフレーズでした。その結果 セ・エム・アッシュ は無名アーティストの登竜門のような存在になります。この流れで当時は毎月、ミニコンサートが開催されていました。

しかしながら予期せぬ試練が訪れます。開店1年後の1995年1月17日に神戸淡路大震災が起きたのです。街は混乱を極め、一部の洋館も崩れました。市内では火災が三昼夜続き、高速道路が倒壊して多くの人命が失われたのです。そんな中で神戸を去るとするオーナーからベーカリーの店と什器を引き継ぎます。山岸氏は地元を支えたいとの一念から、若い店員達に語りかけます。「落ち込んでいてもしょうがない。幸い電気が使えるし水もある。さあここでパンを焼こう」。

いつものように手間をかけ、一心にパンを焼きます。焼け跡に蔓延したキナ臭さの中に、希望を乗せてパンを焼く香りが立ち昇ります。その香りに導かれるように人が集まって来ます。喜んで焼き立てのパンを買い求め、胸に抱いて帰る人々。それから毎日パンを焼き続けるのですが、ガスが復旧したのは3ヶ月後のことでした。既にセ・エム・アッシュ は引き継いだ釜ではパンの需要に応じきれず、北野アレーの中にパン工房を備えた「ブランジエリー c. m. h」を開店します。「計画性を優先しない」という山岸氏が決断した一手でした。北野アレーの「スタジオV」という元ブティックだったパン屋は、不思議な空間を持つ、個性的なベーカリーに変わりました。

ブランジエリー c. m. h 2002年撮影



何よりの驚きは、店に一步足を踏み入れた瞬間に、全てのパンが一齐に顔を見せ、あたかも喜んで迎えているかのように思えるのです。ブティックの棚や平台をそのまま使いながら、陳列の妙だけではない触れ合いが、造り手の気持ちを伝えています。そして全てのパンがキラキラ輝いています。その時、ふと西脇順三郎の詩を思い出しました。

「覆された宝石」のような朝 . . . 「天気」

山岸氏の目指す「フランスの街角にある日常のパン屋」でした。



人気の c. m. h のデニッシュ

北野アレー 1 階には輸入チーズの専門店を営み、気軽にテイスティングができます。広いウィンドウに深紅の大きなシェードをかけ、お客様の安らぎをメインとする姿勢は、北野を愛する セ・エム・アッシュ の変わらぬスタイルです。



輸入チーズ専門店 FROMAGE Baraka (2000年撮影、その後 地階のベーカリーショップを移転) 2Fは「ISOLA」

震災とバブル崩壊の洗礼を受けて、現在（2000年頃）の北野には静けさが戻りつつあります。しかしながらテナント募集のパネルが目立つ街はあまりに寂し過ぎます。知恵を絞り活気を出そうにも住宅街の中に様々なお店が点在する北野商業連合会では、統一の企画プランが立て難いのです。悩みながら導き出した結論が、住人が主役の街づくりでした。150の加盟店の1店1店が個性的な提案をし、各店の活性化に努力することだったのです。

山岸氏はこの連合の副会長としても活動していますが、お互いに楽しい競争を続けながら、豊かな街を育てることの大切さに気付きます。それは価格中心の激しい競争ではなく、住人と共生する街づくりということになります。お互いの顔が見える距離と関係、そして最後は経営者個々の、北野に寄り添う付加価値が決める共生です。

静かさを求める住人と、人が多く賑やかなことを望む商店が共存するのですが、熱っぽくお話を聞かせて下さる山岸氏や、ホームグラウンドである北野に激しい競争は似合いません。まず住人に喜ばれる商いをすることを何よりも大切に思う山岸氏は、地元根差した経営者であり、とてもファッショナブルな方でした。



山岸直幸氏と 2000年

その後ですが、1999年11月に、六甲アイランド内のファッションプラザ RINK・3Fに「ベーカリー&レストラン c.m.h」を開店しました。ここではスターバックスコーヒーとの複合出店が話題となりましたが、平日の昼のテラス席では、乳幼児を連れた若い主婦たちが楽しそうに談笑しています。セ・エム・アッシュの焼き立てパンとスターバックスのコーヒーをテラスで楽しむ昼食は、少し贅沢な楽しみかもしれません。このお店は食事用のパンがよく売れる対面販売のパン屋と、ランチからディナーまで対応する気さくなレストランです。



RINK3F c.m.h とStarbucks



ベーカリー&レストラン c.m.h (六甲アイランド RINK 3F) 2000年撮影

次いで2000年1月には、新神戸駅前のOPA1Fの店を請われて引継ぎ、ピッツアカフェ「LA PIZZA」を開店。そして神戸北野の街の最新ショップは、山岸氏の原点とも言える、コーヒーに拘ったエスプレッソカフェの「CAFÉ et CAFE」で、2000年3月の開店です。ハンター坂の中腹にある、やはり元ブティックだった建物一棟を使い、1Fがアパレルの「NAF NAF KOBE」、その2Fにカフェ「CAFÉ et CAFÉ」を併設しました。ちょっと一息に相応しい明るい空間で、エスプレッソコーヒーとカフェラテやカプチーノを提供しています。



CAFÉ et CAFE 2000~2002年撮影

コーヒーを紙コップで提供するスタイルが珍しくないこの頃ですが、北野の街から缶ドリンクの自動販売機を無くしたいという山岸氏は、歩きながら飲めるスタイルの紙コップが格好いいと言います。一見無造作にディスプレイされ、CAFÉ et CAFÉのシールが貼られた一つの紙コップの存在感を感じながら、ここを後にしました。



無造作にディスプレイされたSOLO CUP



RIN'S GALLERY c. m. h
テラス席上を覆うセイル（帆）

セ・エム・アッシュ というお店を知るにつれ、山岸氏の語る人と街との共生を考えます。一人でできることは小さくとも、多くの仲間や住人と共に歩むこと。

明日の北野の姿を見つめる山岸氏ですが、彼はヨットマンでもあります。リンズギャラリーのテラスに大きな帆布（セイル）を張り、特別仕様のセイルが風にはためいています。ここにはセイルの音とマストの軋みを感じる日々があります。そしてスタンダードの高さによって適えられる、シンプルな美しさがあります。

この話にはとても重要なその後、があります。

山岸氏はその後も請われて出店することがありました。2006年に「c.m.h ミント神戸店」を出店し、続く2007年には旧居留地に「Viennoiserie (ヴィエノワズリー) c. m. h」を出店します。いつしか地元神戸にとどまらず、2009年には大阪福島のラグザ大阪の閉店跡地に「Boulangerie et Café c. m. h」を出店しています。ドミナント圏内であれば、小さな企業でも問題に対応することは比較的容易でしょう。突発的な設備トラブルや商品の過不足にも直ぐに動けますし、スタッフの急な勤務変更も速やかな対応が可能です。しかし一歩ドミナントを離れると、それらの問題一つ一つに時間とエネルギーが必要になります。まして朝の早い時間から仕事が始まるベーカリーでは、あまり知らない街に住み、ベストを尽くして働き続けることとの厳しさは想像できます。慣れ親しんだパンの文化がその地域に馴染まないこともあります。

山岸氏が育て、信頼してきたブーランジエ（ベーカリー職人）の多くが女性でした。築き上げたオーナーとのファミリーのような信頼関係に支えられて、彼女たちの丁寧な手仕事と明るい働きぶりがありました。それはセ・エム・アッシュの価値であり、一番の魅力だと思うのです。残念なことですが、2012年半ばには企業としての輝きを失いつつありました。2013年になると店舗が閉鎖されていきます。経営が苦しさを増す中で、町田の弊社までお訪ねいただき、説明と謝罪を伝えられたことがありました。山岸直幸氏とはそういう方でした。

細部までの詳しいことは解らないのですが、やはりお誘いを受けた出店の繰り返しが重くなり始めていたようです。彼の夢と足跡の一片を知る者として、伝えたいと考えていました。

思えば山岸直幸氏が1977年に北野アレーで始めた、ハンドドリップコーヒーの喫茶店 HISTOIRE は、その後エスプレッソマシーンのあるカフェとなり、ベーカリーと連携したランチを提供していました。2002年春の訪問時に1,500円のビーフシチューランチをいただいたことがあります。創業時代の北野は、高級レストランの1,500円ランチを楽しむ一部客層の街でもありましたが、そこに彼の思いの原点がありました。その間はたったの25年ですが、人も社会も、過去に戻れないほどに変わっていたのです。



ホールのR仕切り壁にHISTOIRE1977の文字が

創業5年後の山岸氏の言葉がタウン誌に残っています。1982年5月3日発行の「KOBECO」ですが、「神戸北野は 界隈の楽しめる町」からの一文です。

『北野町は高級だという認識だった。そこで（北野アレーの）一番小さなスペースで喫茶店を始めた。オープンと同時に風見鶏ブームがきて、お客がどんどん来るようになった。春休み、ゴールデンウィーク、夏休みは全くの観光地になるが、やはり他の季節にも地元のお客様に来て欲しい。でも地元の方には先入観があり、北野町は行きにくいと思うようだ。地元の人に固定客になっていただきたくて「スタジオV」というブティックを始めた。それから私は、地元の方を大切にするという考えでやっています。』（抜粋しました）

KOBECO 1982年5月号

<https://kobeco.hpg.co.jp/wp-content/uploads/2017/06/19820503.pdf>

2022年の今でも、インターネットの検索を見ると「セ・エム・アッシュ（c.m.h）」の素晴らしい評価を知ることができます。ある人は神戸で一番好きなパン屋だったと語っています。オーナーの人柄が大好きだったと語る方がいます。多くのパンやデニッシュの写真を愛おしむように、何ページも掲載して伝える方がいます。

その方々と変わらない気持ちと、山岸直幸氏と彼を支えた多くのベーカリーたちへの感謝の想いを抱えながら、この文を終ります。「c. m. h」の終わらない夢を慈しみながら・・・。

（取材時期：2000年～2002年、今回大幅に加筆修正しました）

*「KITANO ALLEY」は建築としては「北野アレー」と表記されますが、今回は建物のファサード看板に表記された「北野アレー」を使用しています。

© 2022.05 Cafegoods co., ltd. 小林 文夫